

但男女共。此内侍は組外塚本左内足輕水上儀右衛門父子、御大工井口九太夫。土中埋家十三軒。水損壞家六拾七軒。毎日町夫千人宛にて掘之。此時普請奉行茨木左太夫・山崎彦右衛門・生駒萬兵衛・富永權佐・大橋九郎兵衛・梅大學・荒木六兵衛等也。翌十三年二月二日茶臼山又崩る。此時は死人等無之。とあり。昔君雜錄に云ふ。元祿十二年十二月廿三日申刻過、觀音山續き茶磨山崩出、淺野川より此方へ打越、人家多く損じ、死人も有之。川埋り、川上より水溢れ、横山外記後。侍屋敷より材木町後通水付く。廿四日、二百五十石組外塚本左内の死骸今晝掘出す。廿五日御大工中村九太夫死骸今日掘出す。同日崩山新川筋附奉行八人命ぜられ、廿六日より出役之處、翌十三年二月二日未尅、茶磨山去年崩跡重ねて崩れ、新川掘普請所へ崩出。但し怪我人無之。三月十二日崩山新川掘普請落成之由、昨十一日諸奉行より言上に付、月番前田對馬巡見有之云々。とあり。此後はかかる異變はなしといへども、加藤惟寅の蘭山私記に、實曆十年正月茶臼山假橋之上に破目出來、鳴候由にて見物人群參する由。翌十一年七月三日八半時、淺野川靜明

寺の向山崩、組外三百石辰巳八左衛門・次男鐵次郎今年七歳、八左衛門・宅向之興力・荒井瀬左衛門・伴兩人兄十一歳・弟七歳・鐵次郎右兄弟之子供と連立、鶏籠へ敷く砂取りに罷越たり。瀬左衛門方より小者一人差添、右上之山下へ罷越遊び居たる處、上之山五六尺欠落、四人共士に被壓けるを見付、家々へ案内せしに、家内驚き、家來等指遣、早速掘出したり。瀬左衛門せがれ兄は腰より下まで土に埋れ、上は顯れ有之に付、早速に掘出し痛無之。弟も兄と一所に居候故早速掘出し、當座は正氣無之處、追付正氣付きたり。小者は別條無之。八左衛門性は深く土に被埋、掘出し方隙取りける故にや、掘出したる後一向正氣不付、遂に相果たる由。誠に不慮之仕合也。と云へり。按するに、元祿十二年の山崩より實曆十一年に至り、六十三年度なり。此の後は山崩の事なかりけん、舊記等に所見なし。右山崩は元祿二年以來都合四度なりといふべし。

### ○崩れ山

其の地は觀音山の麓にて、淺野川の川岸なり。文政四年二月金澤町續郡地のヶ所町支配と成りたる時、卯辰村領崩れ

山は觀音下町へ建込とありて、觀音下町の町續きなる邸地なり。按するに、崩れ山の名は、元祿年中觀音山崩とて、此の地邊崩れたるゆゑの名なりとぞ。三州名跡記にも、崩れ山は卯辰茶臼山の續き、觀音の出崎の山、元祿十二年十二月廿三日淺野川へ崩れ込み、人家ども多く損亡せし時よりの名也。と見え、金澤事蹟必錄にも、昔は茶磨山の麓に人家町屋有りて、歩士の住所なりしが、元祿十二年極月下旬に山崩れにて、人家を押出し死人夥し。夫より此地を茶磨山の出崎崩れ山と呼べり。と見えたり。されば此の地邊に往古より人家ありしが、元祿の山崩れの時土下に成り絶えたるを、後年に至り再び人家出來せしなるべし。

### ○鉢鼓ヶ淵古傳話

北國巡杖記に云ふ。茶臼山のほとりに貝やき渓とて、とし／＼貝の灰をこしらふ。其うへに圍り一二町餘りの深池あり。濁水をたゞへ、草繁茂したる古境なるが、毎夜／＼初夜過より丑みつ過る頃までも、鉢鼓を叩き池の汀をめぐる音せり。里人等あやしみのぼりて求るに、何等の人も見ぬ。しば／＼下りて聞くに、又もとの如く鉢鼓うちならし

めぐる聲のあり／＼と聞ゆ。この故は、往昔のこととにやありけむ、山隣に長谷山觀音院とて眞言古義の佛閣あり。一面の尊像まし／＼けり。此堂守に大圓とかやいへる老沙門ありしが、生前毎夜／＼此山々を廻順し奉り、大悲の稱號を修せられるに、山賊どもこの僧の衣服を剥ぎ、法施をうばひとりて、死骸をこの池に沈めるとなん。されど殊勝の僧にして、賊徒に身をまかせ、則ち即害水定の念をいたし、此願望をば果さずんば、生々世々怠るまじとて命終られるとぞ。今にその執願のこりけるか、かゝる奇特をなしけるぞいとあはれなることにこそ侍れ。とあり。按するに、右鉢鼓ヶ淵といへる池は、茶臼山のほとり貝焼渓といへる地にありといへど、今も此の名あるか未だ詳かならず。

### ○卯辰山町名

觀音下より卯辰山へ登る坂路の町地を呼べり。此の地邊は、從前は山中の樵道あるのみにて、嶮岨の道路なりしを、慶應三年卯辰山に病院建築を名として、嶮岨なる庚申塚・勘兵衛塚を初め取崩し、谷々を埋めて山上を平均なし、悉